様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　　２３年　４月　１４日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：　2008～2010
課題番号：２０５２０２４４
研究課題名（和文）現代英文学および英語翻訳文学における「ポストコロニアリズム」の表象研究
研究課題名（英文）　Representation of “Postcolonialism” in Modern Literature in English

研究代表者　早川　敦子　（HAYAKAWA　ATSUKO）
津田塾大学・学芸学部英文学科・教授
研究者番号：６０２２５６０４

研究成果の概要（和文）：
21 世紀のグローバリゼーションに対する英語圏文学の応答として、一つにはポストコロニアル批評が、他方には多文化共生の視点に促された翻訳学の理論的展開がある。この二つの流れの密接な相互関係を探り、翻訳文学を含む現代英語圏文学における新たな可能性を検証した。ポストコロニアル批評が関わる文化的政治的マイノリティの言説が、翻訳論においては「他者性」の問題を照射し、歴史の再読・再記述に繋がる翻訳文学の可能性が拓かれたことが後づけられた。

研究成果の概要（英文）：
In its response to the globalization of the 21st century, literature in English has been stimulated by postcolonial criticism on the one hand, and so-called translation studies motivated by multiculturalism has shifted its main focus from linguistic concern to the cultural critique on the other. This project aimed at pinpointing the mutual relationships between postcolonial criticism and translation studies through which the possibilities of literary translation have been illuminated. The postcolonial concern with discourses of the cultural/political minorities has motivated re-reading/writing history from the viewpoint of “the Other” which is of crucial importance in modern literature in translation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野:人文学
科研費の分科・細目：文学・　英米・英語圏文学
キーワード：　英語翻訳文学・翻訳論・ポストコロニアル批評・ホロコースト・ポストモダニズム・グローバリゼーション・ナラティヴ・ディコンストラクション

１．研究開始当初の背景

(1)課題設定の背景は、「20 世紀英文学にみる『歴史意識』の転換および歴史観の表象研究」（基盤研究 C 平成 14～16 年度）のモダニズムからホロコースト文学に至る 20 世紀の

歴史意識の転換への考察、および「現代英文学が志向する『平和構築』の可能性―歴史観・政治意識・倫理の表象研究」（同研究 C 平成 17～19 年度）の「ポストホロコースト文学」と「倫理批評」の関連性への着眼をさらに発展させて、ポストコロニアル批評が拓いた新たな地平から文化の表象の問題や「他者性」への注目を考察するものである。

(2)英文学批評の展開を、歴史意識および歴史観がどのような文化的表象を文学にもたらしてきたかという観点から後づける文脈で、英語翻訳文学を含む現代英語圏文学というさらに広い枠組みに射程を拡げる。

２．研究の目的

(1)理論的展開として、ポストコロニアル批評を英語圏文学の範疇で捉えるにあたり、文化的政治的被抑圧者の言説における「歴史観」の表象に焦点を当て、その変化を明確にすることが目的の一つである。

(2)上記(1)のアプローチに翻訳理論の視座を組み入れることによって、文化翻訳が文学批評とどう関わるかを考察し、さらにそこから翻訳論とポストコロニアル理論の相関関係を導きだす。

３．研究の方法:

２０世紀後半からの批評理論を、翻訳理論の展開との関係性という視点から以下のような段階で読解し、理論の相互関係性に焦点を当てていく方法論を試みた。

そこから抽出された概念をもとに、翻訳論の展開を文学・文化批評の射程の中に位置付ける理論構築を行った。

とくにポストモダニズムとポストコロニアルの双方からの理論的アプローチを交叉させたところで焦点を当てたのが、ホロコーストの言説である。記憶を記述する行為と歴史の再読、ならびに他者性をどのように言説化し、また「翻訳の不可能性」はそこにどう関わるのかという翻訳論のテーマから、具体的なテクストの分析を、ホロコーストの第二世代の作家であるエヴァ・ホフマンの自伝およびホロコースト論を中心に行った。

以下が段階的な方法論の概要である。

(1)ポストコロニアル批評の中からとくに翻訳論を視点に取り入れた理論（ホミ・バーバの異種混淆性への着眼、スピヴァクの「翻訳の政治学」など）に焦点を当て、ポストコロニアル批評がどのような視点で翻訳論を牽引したかを体系的に考察する。

(2)他方、特に近年活性化されてきた翻訳理論の系譜を、ポストモダニズムのナラティヴ論、ポストコロニアル理論、ディコンストラクション理論と水平方向で比較対照することを通して、翻訳論の展開を文学批評理論の展開の中に位置付ける。

(3)上記二段階の方法論を通して、ポストコロニアル批評を転換点においた思想の文脈で、21 世紀における英語翻訳をめぐる問題点と現代的課題を照射する。

４．研究成果

(1)成果と研究により得られた知見

①文化批評としての翻訳：

特に 1980 年代以降の文学批評の展開において、従来のヨーロッパ中心主義の基軸を大きく移動させることで異なる世界観を呈示したポストコロニアル批評と、他方で他者性との関係性の構築を言語の界面で促し、言語における権力構造を照射することによって言語文化を社会的政治的に機能させる視座から歴史の再読・再記述を照射した翻訳理論がさまざまの形で交差し、協働する現象を考察した。

その交叉点を「越境のアポリア」であると想定し、すぐれて現代的課題である「他者」

と「主体」の問題に、この二つの批評理論―ポストコロニアル批評と翻訳論―がどのように関わってきたのかという過程と、そこから拓かれた言説の可能性に光を当てた。

②ポストコロニアル批評との関係性：

新たな研究領域として学際的な文化批評に傾斜してきた翻訳理論は、ポストコロニアル理論にリンクすることにより、たとえばスーザン・バスネットやシェリー・サイモンといった理論家によって「翻訳が植民地主義に共犯してきた」過程をあぶり出すことになり、そこから帝国主義の展開と言語による植民地支配が権力構造を「表象」によって顕在化させていった過程が透視された。すなわち「翻訳による植民化」である。翻訳論は、そこからダグラス・ロビンソンやナイランジャナといった「ポストコロニアル翻訳論」を提起し、翻訳者の立ち位置を明確にすることによって、脱植民地化の過程に翻訳が機能しうることを主眼に、「再記述」としての翻訳の役割を呈示している。ここで、翻訳論が歴史の再読、再記述に有効性をもつという側面が明確になった。そのような転換を経て、翻訳論そのものが言語学的アプローチから、文化批評へと大きく方向を変えていった流れを照射することも、21 世紀に至る思想史の展開を辿る意味で新たな知見をもたらした。

とくにドイツのロマン主義の国家形成の文脈でゲーテやシュライヤマハーらによって提唱された翻訳の有効性や「世界文学」の理念が、このような翻訳論の展開によって再読されてきたことも、現代の「世界文学」を考える上でひじょうに示唆的な意味をもつ。国家的アイデンティティと言語、文学の関係性が揺らぎ、異なる言語の「交渉」の界面で「翻訳の不可能性」が前景化されるからである。その過程において、現在の「世界文学」の文脈で「異なる他者」が照射されてくる。翻訳論の文脈では、ポール・リクールなどの哲学からのアプローチとともに、モナ・ベイカーや、ローレンス・ヴェヌーティらの政治的社会的行為として翻訳を捉える理論家によるアプローチの方向性が指摘できる。

③物語への注視と歴史の再読：

一方で、歴史の再読・再記述の視座は、ポストモダンのナラティヴ論との相関関係からも説明づけることが可能である。ホワイト、リクールらの物語論の「ナラティヴの転回」を援用して、翻訳もまた「他者を語る言説」として歴史の再読に関わることをホロコースト文学を具体例に挙げて検証した。とくにホロコーストの第二世代で、母語ではない言語でホロコーストの記憶を言説化した書き手たち（例：エヴァ・ホフマン）らの作品に焦点を当て、翻訳論の重要な課題である「他者を語る」言説の可能性と限界、そこから「翻訳の不可能性」という概念を抽出した。そこでウォルター・ベンヤミンの「翻訳者の仕事」、デリダの「差延」および「痕跡」を翻訳と関連付けた概念を適用することで、現代思想の文脈で翻訳論を位置付ける試論を組み込んだ。ここからさらにレヴィナスやアレントらの倫理への射程にも拡がる可能性が透視される。

④このように、翻訳論を、20 世紀後半からのさまざまの批評理論に関連付けて捉え、体系づけたことが、一つの成果である。この流れに沿って、「越境のアポリアに立つ」（論文 160,000 字）を報告論文として作成した。概要は以下である。

<u>越境のアポリアに立つ</u>

（基盤研究 C 課題番号 20520244「現代英文学および英語翻訳文学における『ポストコロニアリズム』の表象研究」報告論文）

Aporias of Translation：Representation of Post-colonial Time and History

序章；

I.　文化批評としての「翻訳」：ポストコロニアル批評と翻訳論
(Translation as Cultural Critique: Postcolonial Theory and Translation Studies)
1. 多様性と越境のダイナミズム：翻訳論の現代的展開
2.　翻訳による植民化・脱植民化：共犯と批評の展開
3. 異質性がせめぎ合う「コンタクト・ゾーン」：翻訳の磁場
4. 時間軸と空間への介入：「普遍性」に対峙する文化「翻訳」
5.　翻訳者の立ち位置：歴史の「読解」
（キーワード：ヨーロッパ中心主義、ヘゲモニー、コロニアリズム、異種混淆性―ホミ・バーバ、ダグラス・ロビンソン、ウォルター・ベンヤミン、抵抗の翻訳―ローレンス・ヴェヌーティ）

II.　再・読／記述としての「翻訳」：モダニズム後と歴史の解体
(Re-reading／writing　Postmodernism：Translation after Modernism)
1. 再記述としての翻訳
2.「再読」から「再翻訳」へ
3. インターテクスチュアリィティとしての翻訳：バベル神話の崩壊
4. 歴史の「再読」：ディコンストラクションと翻訳論
（キーワード：再記述としての翻訳―アンドレ・レフェヴェール、再翻訳―テジャスウィニ・ナイランジャナ、ディコンストラクション―デリダ、インターテクスチュアリティ、スピヴァク）

III.「他者」を語る言説―「物語」への注視
Narrative of “the Other”
1. ナラティヴ論の転回と「大きな物語」の解体
2.　歴史意識に協働する「記憶」
3.「ホロコースト」と歴史の記憶：ポストモダニズムのナラティヴ
4.　ホロコースト言説への助走：「痕跡」の記憶
（キーワード：ナラティヴの転回、ポストモダニズム、記憶、歴史意識、ホロコースト、痕跡―エマニュエル・レヴィナス）

IV. 忘却への抵抗：ホロコーストを語る自伝
(Remembering the Holocaust: Self-trans-lation as Re-narration)
1.「ホロコースト文学」という言説
2. ホロコースト「その後の生」と自伝：「不在」を語る言説
3.　表象の解体：「他者」へのまなざしが向かうところ
4. 「時間」への応答：「記憶」の主体
（キーワード：ホロコースト生還者―エリ・ヴィーゼル、翻訳不可能性、第二世代―エヴァ・ホフマン、自己翻訳）

V. 世界文学とは何か
(What is World Literature?)
1. 自身を語ること
2. 他者を語ること
3. 未来への記憶と翻訳
4. 「世界」という言説
（キーワード：トラウマ、自伝・伝記、他者、ポール・リクール、世界文学―ゲーテ、比較文学、越境性）

結び　越境のアポリア

Abstract
In the dynamic re-construction of the world picture after the deconstruction of euro-centric hegemony in the previous centuries, translation studies has shifted its main focus from linguistic concern to the cultural critique in the contexts both of postmodern “narrative

turn" and postcolonialism. This project aims at pinpointing the development of translation theories after post/modernism through which re-reading/ writing history from the viewpoint of "the Other" has been drastically promoted in diverse ways. How the language of translation can cooperate in creating reciprocal relation-ship between "the self" in target language and "the other" in source-culture has become a matter of crucial importance. Such consciousness has been motivated also by literary works including autobiographical writings as self-trans-lation (case study : Eva Hoffman) and so-called "world literature"(case study: Holocaust fictions in translation). Interdisciplinary approach would also be proposed.

(2)成果の位置づけ

①成果についてはそれぞれの段階で紀要等で国内外に公開し、とくに2010年度には在外研究の機会を通して滞在先のイギリスの研究機関でのプロジェクトでの発表やフィードバック、またカナダやスペインでの学会などでの発表を通して多くの学際的な研究者たちとの意見交換が可能となった。ロンドン大学での翻訳学プロジェクトならびに、オックスフォード大学でのポストコロニアル研究プロジェクトなどでの協力を今後も継続することになり、本研究が国外でも展開できることは、大きな成果だといえる。

②上記成果に並行して、ホロコーストの言説のテクスト分析を行うにあたり、エヴァ・ホフマンのホロコースト論『記憶の標―ホロコースト第二代の思索』(邦訳仮題) の日本語翻訳に取り組んだ。第二世代による間接的な視点からのホロコースト解読とともに、ヨーロッパ中心主義の脱構築に時期を同じくしてどのようにホロコーストが世界で受容されていったかを多角的に論じる本著は、歴史の再読と再記述と言う観点からみても、きわめて意義深い、優れたホロコースト論だといえる。研究に付随して上梓することとなった本著の日本語翻訳が、日本国内の「ホロコースト」研究および歴史的関心の活性化に繋がることを期待している。

(3)今後の展望

①上記 (2) のように、国外での共同研究への参画が今後も継続するため、翻訳論の現代的課題をさらに多角的に考察していく予定である。とくに「他者と自身を語る」というテーマに関しては、イギリスにおいてハーマィオニィ・リーやローラ・マーカスらが「自伝・伝記」学を理論化している経緯もあり、21 世紀の文学の可能性をめぐる一つのテーマとして注目できる。

②上記 (1) ③の最後に指摘したように、「他者性」への注視は、思想体系の流れの中でレヴィナスやアレントらに繋げていく可能性が示唆される。とくに翻訳論でも論じられるデリダの「痕跡」の概念は、レヴィナスと深く関わるものであり、翻訳論の文脈に現代哲学の射程をとりこむことができるのかどうかも、課題の一つである。

③今後の展望のもう一つの方向性は、「日本文学の外国語翻訳」へのアプローチである。第二次大戦後の占領下で日本の原爆詩が検閲によってどのように影響を受けたかを、検閲の翻訳の過程から検証する研究発表を2010 年 5 月にカナダの翻訳学会において行い、大きな反響があった。現在の翻訳論の世界的な視座の中に、日本での翻訳の事例

を組み込んでいくことも重要な課題の一つである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①早川敦子、「自己翻訳から『歴史』の再読へ―エヴァ・ホフマンと二つの『自伝』」、津田塾大学紀要、査読有、43、2011、109-125.
② ATSUKO HAYAKAWA, “Translation as Politics: Translation of Sadako Kurihara’s War Poems”, *Translation Terminology Writing Studies in the Text and Its Transformations*. 査読有、Vol. XVIII No.2 (TTR, Concordia University) 2011(accepted).
③早川敦子、「『他者』を語る言葉：翻訳論の現代的課題」、津田塾大学津田塾大学紀要、査読有、42、2010、45－69.
④早川敦子、「忘却への抵抗：Mahmoud Darwish とパレスチナの表象」、津田塾大学紀要、査読有、41、2009、45-96.
⑤早川敦子、「歴史のクレバス―ヴァージニア・ウルフと危機の時代」、津田塾大学紀要、査読有、40、2008、43－56.

〔学会発表〕（計４件）
① ATSUKO HAYAKAWA, “Narrating the Unheard Voices of Children: Translation beyond Time and History,” International Board on Books for Young People: 32th World Congress, 11 September 2010, Santiego de Conpostella, Spain.
② ATSUKO HAYAKAWA, “Atomic-bomb Poems under Censorship: Translation Studies in the Postcolonial Context,” Canadian Association of Translation Studies, 29 May2010, Concordia University, Montreal, Canada.
③早川敦子「ヴァージニア・ウルフとセザンヌ」日本ヘミングウェィ協会、2009 年 5 月 30 日、東京大学
④早川敦子「翻訳が拓く新たな世紀―ポストコロニアルの地平」日本通訳翻訳学会、2009 年 5 月 17 日、立教大学

〔図書〕（計１件）
①早川敦子（25 名、17 番目）、ミネルヴァ書房、『英語圏諸国の児童文学』、2011 年 3 月、ミネルヴァ書房　(135-143)

〔その他〕（計３件）
①翻訳　早川敦子訳『ある家族の秘密』（オランダ、アムステルダム、アンネ・フランク記念館制作のオランダならびにドイツの中学高校で使われているホロコースト関連の歴史の副読本。原題 The Discovery、原作 Eric Heuvel）、汐文社、2009.
②翻訳　早川敦子訳『真実をさがして』（同上の続編。原題 The Search）、汐文社、2009.
③早川敦子、「越境する『言葉』―現代英語圏文学の新たな地平」、平成 17－19 年度文部科学省科学研究補助金基盤研究Ｃ報告論文（2008 年 4 月提出、121）

６．研究組織　（単独）
(1)研究代表者
早川　敦子（HAYAKAWA ATSUKO）
津田塾大学・学芸学部英文学科・教授
研究者番号：６０２２５６０４